

〈訳注研究〉

蔵訳『阿闍世王経』第II章訳注研究^{*}

宮 崎 展 昌

はじめに

初期大乘經典の一つに数えられる〈阿闍世王経〉(**Ajātaśatrukaukṛtya (prati) vinodana*) は、その想定サンスクリット語タイトルに示されているように、父王を殺害した阿闍世(**Ajātaśatru*) がその後悔の念(**kaukṛtya*) を解消する(**vinodana*) 物語を軸としながら、種々の物語や教説が説かれる。ただし、その阿闍世王が登場し、彼の抱える後悔の念をめぐる物語が展開するのは、同経の第V章以降であり、第I章から第IV章までの部分はかなり長いかたちで、いわゆる「序分」を形成している¹。本稿では、その「序分」のうち、竺法護訳で「化仏品」と題される第II章について蔵訳からの訳注研究を提示する。第I章では25名の菩薩と4名の天子、そして文殊が順々に一切智者に関して発言するが、それらの間に対話はみられないのに対し、第II章の前半部分では、第I章から登場している弁積菩薩と文殊、文殊の化作した化仏が種々の問答や説法を繰り広げる。その内容は、化作に関するものや菩薩が学ぶべきこと、一切法に関するもの、業や果報などについて多岐にわたる。そして、第II章の後半部分(本訳注§8以降)では、釈尊が登場し、その威神力によって別の会座にいた文殊らを釈尊らの会座へと出現させる。その後半部分では、蔵訳(チベット語

* 〈阿闍世王経〉全体にわたる蔵訳(チベット語訳)の批判校訂版およびその蔵訳からの訳注研究について、訳者は数年来準備を進めている。その全体の公表に先行して、本稿では同経第II章の訳注を試みに提示し、諸先学の御批正を仰ぎたいと思う。また、本訳注研究の投稿にあたって2名の査読者から貴重な訂正案およびコメントを頂いたことに深く感謝申し上げる。言うまでもなく、残された不備は訳者に帰する。

1 〈阿闍世王経〉の構成・梗概については、拙著[2012: 32ff] 参照のこと。章分けについては、拙著[2012] 同様、竺法護訳『普超三昧経』にみられる分品を借用する。一方、支識訳『阿闍世王経』を現代語訳した定方[1989]では、章は設けずに、定方氏による独自の分節がなされている。本稿で扱う第II章は同書では第5節から第7節に相当するが、具体的な対応については訳注に記す。

訳)で *bam po* が区切られ、登場人物や説相がそれより以前の部分とは若干異なるので、第III章以降と第I章からそこまでの部分を接続する役割を担っているとみなすことができるだろうか。

なお、本稿では、訳者の判断にもとづいて、前後で話題や場面が切り替わるとみられる箇所を節を区切り、適当な見出しを付けた。

法天訳『未曾有正法経』にみえる他訳との相違点について

法天訳『未曾有正法経』は、現存する〈阿闍世王経〉の漢訳の一つとして知られるが、拙著〔2012: 52ff〕でも指摘したように、同訳ではその翻訳過程において意図的な改変が加えられたと考えられる。本稿で扱う第II章にもその痕跡と考えられる他訳との相違点をみてとれる。ここではそれらについて整理し、訳注の中で逐一指摘することは控える。

§1: [法天訳以外] 文殊が(自らとは別の)釈迦牟尼に等しい仏を化作する

[法天訳] 文殊自身が釈迦牟尼と等しい仏へ^{へんげ}変化する。

§2-6: [法天訳以外] 化作された如来が弁積菩薩と問答したり、説法する。

[法天訳] 文殊の変化した如来が弁積菩薩と問答したり、説法する。

§6 末尾: [法天訳以外] 文殊に化作された如来が姿を消す。

[法天訳] 如来に変化していた文殊がもとの姿に戻る。

いずれの相違点も、文殊が自身とは別に化仏を化作するか、文殊自身が如来に変化するかの違いによるもので一貫性がみられる。このような相違点が、諸本がもとづいた原本の相違にもとづくという可能性は完全には否定できないものの、第II章以外にもみられる、法天訳と他本との相違点とも総合的に勘案すれば、上記の相違点もまた法天訳の翻訳過程で生み出された意図的な改変による可能性が高い。

訳注の方針

本稿では〈阿闍世王経〉の藏訳テキストからの現代語訳を提示する。依拠する藏訳テキストは訳者が現在準備を進めている、暫定的な批判校訂本²とし、用

いた蔵訳資料の間に重大な異読がみられた場合は注記する。言うまでもなく、同経の蔵訳テキストは翻訳文献であるので、そのもとになったであろうサンスクリット語文を可能な限り想定しながら訳出することを試みる。以下、その他の点について箇条書きで記す。

- [想定梵語] 原則的にアステリスクを付して記す。ただし、紙数の関係から、単語レベルのものは括弧内に記すのみでその典拠は割愛する。漢訳諸本における、相当する漢訳語も併記したほうがよい場合などはその典拠も合わせて注記する。
- [固有名] 紙数の関係から、本稿では想定梵語からのカタカナ表記は初出時に示すのみで、繰り返される場合は相当する漢訳語（例：弁積菩薩、光嚴菩薩）を借用するか一般に知られる漢訳名（例：文殊、舍利弗）を用いることにする。
- 相当する現存漢訳經典、特に支識訳および竺法護訳と蔵訳との間に注目すべき異同が見られる場合は重点的に注記する。早くとも9世紀頃に訳出されたとみられる蔵訳本に対して、上記2漢訳はそれぞれ2世紀後半、3世紀に訳出され、蔵訳本とは異なる系統に属し、同経のより古い姿を探る上で貴重である。よって、それら漢訳2本と蔵訳本の異同を詳細に記すことは重要である⁴。

2 現時点では、あとの略号表で掲げる16種の資料を用いて、蔵訳〈阿闍世王経〉の批判校訂本を準備している。ただし、ラダック地方のヘーミスより最近発見された写本カンギュル2種（He, Hi）は断片であり、双方とも本稿で扱う第II章は含まず、タボ寺写本（A）も第II章はその冒頭しか含まない。なお、校訂本の作成にあたっては便宜的にロンドン写本を底本としている。ヘーミス写本カンギュルに関しては Tauscher [2015] を参照のこと。

3 チベットの経録『デンカルマ』では〈阿闍世王経〉は「漢文蔵訳經典」として登録されているが、現存する同経の蔵訳本が漢文蔵訳ではないことについては拙著 [2012: 141ff] 参照。

4 〈阿闍世王経〉の諸テキストのうち、支識訳と竺法護訳、アフガニスタンで発見された梵本断片が同じ系統に属し、蔵訳と法天訳が別の系統に属することについては拙著 [2012: 48ff] 参照。また、加納 [2015] で報告されているように、最近発見されたカシミール由来とみられる同経の梵本抄本についても支識訳や竺法護訳の系統に近い可能性が高い。なお、蔵訳〈阿闍世王経〉の批判校訂本と合わせて、漢訳諸本および梵本断片を対照した諸訳対照本についても公表に向けて準備を進めている。

略号および使用テキスト

- BHSD Edgerton, F. ed., *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary*, 1953.
(Reprint: Rinsen Book, 1985)
- KP *Kāśyapaṭṭipatti*, M. I. Vorobyova-Desyatovskaya ed., *The Kāśyapaṭṭipatti: Romanized Text and Facsimiles*, International Research Institute for Advanced Buddhism, Soka University, 2002
- LCTSD Lokesh Chandra ed., *Tibetan-Sanskrit Dictionary*, 1959-1961.
(Reprint: Rinsen Book, 1971).
- MVy *Mahāvīyutpatti*, 榊亮三郎編著『梵藏漢和四譯對校翻譯名義大集』
1916-1925. (Reprint: 国書刊行会, 1981)
- Negi Negi, J. S. ed., *Tibetan-Sanskrit Dictionary*, Central Institute of
Higher Tibetan Studies 1993-2005
- T. 大正新修大藏経
- Vajra *Vajracchedikā Prajñāpāramitā*, 渡辺章悟編『金剛般若経の梵語資料集成』山喜房佛書林, 2009.
- Vkn *Vimalakīrtinirdeśa*, 大正大学総合佛教研究所梵語佛典研究会編
『梵文維摩経—ポタラ宮所蔵写本に基づく校訂』大正大学出版会,
2006.

藏訳『阿闍世王経』⁵ 諸本

- A タボ (Tabo) 寺写本 No. 1.4.15.1 (Running No. 26); Ke 32, 45,
47, 50-51, 53, 61, 61-75, 77-79b2. (第II章
は冒頭部分しか含まない)
- B ベルリン写本 No. 224: mdo sde, Tsha 275b5-343a2.
- Ba バスゴ (Basgo) 写本 No. 49.2: Mdo, Nga 76a2-160b4.
- Bth バタン (Bathang)写本 No. 57: Pa 150a6-199b1.

5 チベットカンギル諸本の〈阿闍世王経〉の情報については、ウィーン大学の Department of South Asian, Tibetan and Buddhist Studies が取り組んでいるプロジェクトが作成したデータベース The Resources for Kanjur&Tanjur Studies (<https://www.istb.univie.ac.at/kanjur/xml4/xml/index.php>) を参照にした。

- D** デルゲ版 No. 216: mdo sde, Tsha 211b2-268b7.
- G** ゴーンドラ (Gondhla) 写本 No. 224: Tsha 275b5-343a2.
- He** ヘーミス (Hemis) 写本(I) No. 48.1: mdo, Nga 133-157a6. (第 X 章途中からの断簡)
- Hi** ヘーミス (Hemis) 写本(II) mdo, Nga 77-81, 91-92, 95, 100, 114-118, 148-152a1. (第 II 章は含まない)
- J** ジャンサタン (リタン) 版 No. 159: mdo sde, Tsha 234b2-295a6.
- L** ロンドン写本 No. 166: mdo sde, Za 273a7-354a6.
- N** ナルタン版 No. 201: mdo sde, Ma 339a4-427b6.
- P** 大谷北京版 No. 882: mdo sna tshogs, Tsu 220a5-281a5.
- Ph** プクタク (Phug brag) 写本 No. 289: mdo sde, Ke 1b1-85b3.
- S** トク宮 (Stog Palace) 写本 No. 223: mdo sde, Za 266b7-351a7.
- T** 東京写本 No. 223: mdo sde, Za 247a8-321a8.
- U** ウランバートル写本 No. 272: mdo sde, Za 237b4-312b8.

〈阿闍世王経〉漢訳諸本

【識】支婁迦讖訳『阿闍世王経』(大正新修大蔵経 No. 626)

【護】竺法護訳『普超三昧経』(大正新修大蔵経 No. 627)

【天】法天訳『未曾有正法経』(大正新修大蔵経 No. 628)

参考文献

- Karashima, S. [2010] *A Glossary of Lokakṣema's Translation of the Aṣṭa-sāhasrikā Prajñāpāramitā* 『道行般若經詞典』, International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University, 2010.
- Tauscher, H. [2015] "The 'Early Mustang Kanjur' and its Descendants," *Tibet in Dialogue with its Neighbours: History, Culture, and Art of Central and Western Tibet, 8th to 15th Century*, Forte, E., Liang, J., Klimburg-Salter, D., Zhang, Y., and Tauscher H., eds., WSTB 88, pp. 463-481.

- 岩松浅夫 [1985] 「『天中天』考」, 『東方』 1, pp. 201-219.
- 大西啓一 [2004] 「Kumārabhūta 小考」, 『待兼山論叢 哲学篇』 38, pp. 1-18.
- 加納和雄 [2015] 「『阿闍世王経』抄本の梵文写本」, 『印度学仏教学研究』 64-1, pp. 355-349.
- 齋藤 滋 [2006] 「初期アビダルマ仏教における「我」の同義語について」, 『印度學佛教學研究』 54-2, pp. 1017-1012.
- 定方 晟 [1989] 『阿闍世のさとりの一仏と文殊の空のおしえ』, 人文書院、東京.
- 西村実則 [1988] 「ガンダーラ語仏教圏と漢訳仏典」, 『三康文化研究所年報』 20, pp. 49-125.
- 幅田裕美 [1990] 「大乘〈涅槃経〉におけるアートマン論」, 『印度哲学仏教学』 5, pp. 173-190.
- 蜜波羅鳳洲 [1998] 「藏訳『宝聚経』(*Ratnarāṣi-sūtra*) 第2章「比丘品」の和訳と研究」, 『高野山大学論叢』 33, pp. 1-32.
- 宮崎展昌 [2012] 『阿闍世王経の研究—その編纂過程の解明を中心として』, 山喜房佛書林、東京.

(本研究は JSPS 科研費 JP16K16694の助成を受けたものである。)

【藏訳『阿闍世王経』第Ⅱ章訳注】

第Ⅱ章 文殊と化仏⁶

§1 如来を化作する文殊

その時、菩薩・大士プラティバーナクータ（弁積⁷）はマンジュシュリー・クマーラプータ（文殊師利法王子⁸）に次のように言った。

「文殊よ、こちらへお越しください。如来の面前に行って、菩薩はどのようにしてなすべきか、如来に直接お尋ねする」

そこで、文殊師利法王子は、まさにその場所に、世尊シャーキャムニ（釈迦牟尼、*Śākyamuni⁹）の色と姿形、背丈と胴回り¹⁰が等しい、一人の如来を化作し¹¹た。そこで、文殊師利法王子は弁積菩薩・大士に次のように言った。

「善男子よ、菩薩はどのようになすべきか、この眼前におられる如来にお尋ねなさい」

§2 菩薩のあり方

そこで、その化作された如来に弁積菩薩・大士は¹²「世尊よ、菩薩はどのよう

6 【護】「化佛品第二」定方 [1989: 33]「第5節 にせ仏の説法」

7 *spobs pa'i phung po*: *Pratibhānakūṭa (Cf. MVy 703) 【識】「波坻槃（盤）拘利」「樂不動菩薩」【護】「辯積」【天】「辯積」Pratibhānakūṭa という固有名は、本経第I章で第16番目に登場する菩薩であり、同一の菩薩とみなしてよいであろう。他典籍での用例としては、Vkn Ch. I, §4 で同じく菩薩名として確認でき、上記のようにMVy でも菩薩の名として登録されている。

8 一般的に、文殊（*Mañjuśrī）と併用されて、その形容句とされることが多い「クマーラプータ」（*kumārabhūta, *gzhon nur gyur pa*）については、その語義や原義、由来についてはこれまでに明らかにされてきたとは言いがたい。大西 [2004] では、それまでの Lamotte、平川、袴谷などの諸先学の先行研究について整理するとともに、初期仏教文献やジャイナ教文献における用例を調査しているが、kumārabhūta の原義や由来に関しては結論を保留している。本稿では、*kumārabhūta については、鳩摩羅什が用いた漢訳語「法王子」を便宜的に借用する。

9 *sha' kya thub pa*: *Śākyamuni. 【識】「釋迦文」【護】「能仁」【天】「釋迦牟尼」

10 *kha dog*: *varṇa; *dbyibs*: *ākāra (LCTSD 1713); *chu zheng*: *ānāha-pariṇāha (LCTSD 705)

11 *mngon par sprul to*: *abhinir√mā (Cf. Negi 1037)

12 【識】「不知是爲化」【天】「不知化相謂即如來」という一節がそれぞれ挿入され、弁積菩薩は如来が文殊に化作されたことに気が付いていないことが記されている。

になすべきであろうか」とそのように申し述べると、彼〔の如来〕はおっしゃった。

「私と同じように、菩薩もなすべきである」

〔弁積菩薩は〕申し述べた。

「それでは、世尊はどのようなのであるのか」

その世尊はおっしゃった。

「布施はなされず、戒はなされず、忍辱はなされず、精進はなされず、禅定はなされず、智慧はなされず、¹³欲界においてなされず、色界においてなされず、無色界においてなされず、身体によってなされず、言葉によってなされず、意識によってなされない。すなわち、すべてについてなされず、関与しない。善男子よ、それをどのように考えるか。化作されたもの（*nirmita）によって何がなされるのか」

〔弁積菩薩は〕申し述べた。

「世尊¹⁴よ、化作されたものによってはなされない」

〔如来は〕おっしゃった。

「善男子よ、菩薩はそのようになすべきである」

§3 一切法と化作

そこで、弁積菩薩・大士は文殊師利法王子に次のように言った。

「文殊よ、この如来は化作されたものではないのか」

彼（＝文殊）は言った。

「善男子よ、一切法は化作を本性とすることは確かである。すなわち、幻術という特徴より離れない」

〔弁積菩薩は〕言った。

「文殊よ、その通りである。一切法は化作を本性とする。すなわち、幻術という特徴より離れない」

〔文殊は〕言った。

13 以上「六波羅蜜」の各項目を列挙するが、【天】では「布施」を欠く。以下、三界と三業について列挙される。

14 【護】では「天中天」（*devātideva/*devadeva）という呼びかけがなされる。bhagavat に相当する箇所です「天中天」という訳語が見られることに関しては、岩松[1985] 参照。

「一切法は化作を本性とするものであるならば、どうしてあなたは『この如来が化作されたものではないのか』¹⁵という思いをなしたのか」

〔弁積菩薩は〕言った。

「誰によって〔如来は〕¹⁶化作されたのか」

〔文殊は〕言った。

「私によって、行為の結果（業の異熟¹⁷）が清浄であるものとして化作されたので、ここにおいて¹⁸、本性として、自我（*ātman）、あるいは衆生（*sattva）、あるいは生命（*jiva）、あるいは個我（*pudgala）¹⁹らが、仏として存在すること、あるいは凡夫として存在することはない」

§4 菩薩が学ぶこと

そこで、如来のそのお身体^{からだ}に向かって、弁積菩薩・大士は次のように申し述

15 蔵訳ではこの文殊の問いかけに対する答えはなく、弁積菩薩が反問しているような形になっている。一方、【識】では「仁者！謂以諸佛悉化」と弁積菩薩が回答し、【護】では「一切諸佛及一切法豈不化耶？」と文殊が反語的に自答している。【天】では、弁積菩薩によってこの問いかけが発せられ、それに対して文殊が変化^{へんげ}したところの如来が「善男子！豈唯此佛是幻化相、所有一切如来皆幻化相」と回答している。いずれの漢訳でも「あらゆる仏（如来）は化である」という趣旨の回答がなされている。

16 蔵訳ではこの文の主語は明確でないが、前注15でみたように、諸漢訳の記述を参照に「如来は」という語を補う。【識】「其（←言）佛者從何所化？」

17 *las kyi rnam par smin pa*: *karmavipāka (MVy 121) チベット語訳からはこのように原語を想定できるが、【識】【護】ではそれぞれ「所作本清浄」「自然業浄而化之耳」となっており、「所作」あるいは「業」、すなわち、*karman だけが言及されているようにみえる。後続の§7でも同様に、【識】【護】でともに「所作」となっているところに、蔵訳では *karmavipāka と想定できる語が現れる箇所が見られる。注33参照。

18 この箇所の蔵訳 'di la (*iha, ここにおいて、これに関して) は具体的に何を指しているかは明確でない。【識】では「仏」、【護】では「菩薩」を主語にした文章になっている。

19 蔵訳では上記のように「我・衆生・生命・個我」の四項目が列挙される。一方、漢訳では【識】「吾我・人・壽命」【護】「我・人・壽命」とし、この両訳では「個我」(*pudgala) を欠く。それに対して【天】では「我・人・衆生・壽命・士夫(*puruṣa)・有識(*māṇava)・補特伽羅」とする。幅田[1990]、蜜波羅[1998]などに指摘されているように、これらの列挙は広く仏典に確認できるもので、例えば、KP §52や Vajra §15, 23, 25, 28, 31などにも確認できる。齋藤[2006]によれば、これらの語句はアビダルマ文献で「我」の同義語として用いられる。

べた。

「世尊は何について学んで、さとりを獲得したのか」

〔如来は〕 おっしゃった。

「善男子よ、学ばないことが菩薩にとっての学ぶことである。遵守しないことが菩薩にとっての遵守することである。畏れないことが菩薩にとっての学ぶことである。分別しないことが菩薩にとっての学ぶことである。行わないことが菩薩にとっての学ぶことである。

善男子よ、とどまるところのないことと、傲慢でないこと、飾り立てないこと、受け取らないこと、捨てないこと、赴かないこと、文字のないこと、不生であること (*anutpāda)、不滅であること (*anirodha)、不来であること (*anāgata)、不去であること (*agata)、不住であること (*apratiṣṭhita)、特徴を持たないこと (*animitta)、実体のないこと、不可得であること (*anupalambha)、すべての想念を離れることは菩薩・大士たちにとっての学ぶことである。すなわち、そのように学ぶところの、彼らは正しく学ぶものである。

そのように学ぶところの彼らはいかなるものに関しても怒ることはない。そのように学ぶところの彼らはいかなるものに関しても貪ることはない。そのように学ぶところの彼らはいかなるものに関しても欲することはない。いかなるものからも解脱することはない。そのように学んだところの彼らはいかなるものに関しても貪ること (*rāga) はない。いかなるものからも貪りを離れること (*virāga) はない。怒ることもない。愚かになることもない。そのように学ぶところの彼らは学ぶことを望むものと言われる。学ぶことを望むところの彼らはいずれの趣²⁰へも赴かない。〔いずれの趣からも〕 来ることもない。それゆえ、菩薩・大士は無上正等覚をさとることを望むものとして、私のように、輪廻²¹もなく、涅槃もなく、捨てること

20 'gro ba: *gati (Mvy 6517) 【識】「惡道」【護】「諸趣」

21 【識】【護】では、ここで「私のように学ぶべし」として、化仏による発言が一旦切られる。それを受けて弁積菩薩が【識】「何所是佛學？」【護】「云何佛學？」という質問をし、それに対して、化仏が再び「仏の学すべきこと」に関して説くという構造になっている。一方、【天】ではこの節の冒頭の「学を望むところの彼ら」云々という一文を欠き、ここの「私のように」という言葉のみあたらない。同時に、上記のような、【識】【護】に確認できる問答はなく、以下の教説内容も藏訳に近いものになっている。

(*tyāga) もなく、取得すること (*upādāna) もなく、良き習慣 (戒、*śīla) もなく、悪しき習慣 (悪戒、*duḥśīla) もなく、忍耐 (忍辱、*kṣānti) もなく、悪意 (*vyāpāda) もなく、精進 (*vīrya) もなく、怠惰であること (*kausīdya) もなく、禪定 (*dhyāna) もなく、精神の散乱 (*vikṣipta) もなく、智慧 (*prajñā) もなく、劣った智慧 (*duḥprajñā) もなく、学もなく、不学もなく、なすこともなく、なさないこともない。そして、私のように、獲得することもなく、獲得しないこともなく、明らかにすることもなく、さとりもなく、仏の諸法もなく、自己という想念もなく、衆生という想念もなく、命という想念もなく、個我という想念もなく、法という想念もなく、想念そのものもなく、無想念でもない²²として、私に倣って学ぶべきである」

§5 一切法について

(化仏による発言の続き)

「それはどうしてかという、善男子よ、一切法は幻術という特徴を自性とするものであり、異なることはない、変化しない。善男子よ、一切法はそれぞれ異なることはない、不二 (*advaya) である。善男子よ、一切法は眼の領域²³から外れているので見るができない。善男子よ、一切法は区別がないので平等である。善男子よ、一切法は変動することなく²⁴ (*nirīha)、動くこともない²⁵ (*niśceṣṭa) ので、〔一切法は〕愚鈍である。

22 蔵訳諸本のうち、BthLSTU では *'du shes pa'ang* (Bth: *pa yang*) *ma yin par* とするのに対し、BBaDGJNP では *'du shes med pa'ang ma yin par* とする。それらに対して、直前の「法という想念もなく～」以降から対応する諸漢訳は以下の通りであり、後者の読みを支持するようなので、ここでは後者の BBaDGJNP の読みを採用する。

【識】「亦不法想，亦不無法想，不想，無想」

【護】「亦無法想，亦無有想，亦無無想」

【天】「無法想，亦無非法想，非有想，非無想」

23 *mig gi lam*: *cakṣuspatha (Negi 4416) 「一切法は見るができない」とする箇所に対応する【識】の文言は「雖無央數事，念之皆空，無所有合則爲空，諸法不可見」となっており、「空」と関連した説明になっている。一方、【護】では「一切諸法而不可見，一切諸法超度眼句」とし、蔵訳とは順序が逆になっているが内容はほぼ対応する。

24 この箇所、蔵訳にみえる「変動することなく、動くこともない」という理由句は

すなわち、それら(=一切法)に関して表されることは²⁶ない。表されることのない諸法は実に生じない。そのように信じるところの彼らは、解脱に関して傲慢ではなく、なすべきことに関して傲慢でなく、さとりに関して傲慢ではない」

§6 恐れのない菩薩と虚空の喩え

(化仏による発言の続き)

「善男子よ、それゆえ、菩薩・大士はこのような学すべきこととなすべきことが説かれたとき、畏れず、怒らず、恐れないであろう。すなわち、そのものが菩薩と呼ばれる。善男子よ、例えば、虚空界(*ākāśadhātu)は火(*teja)を畏れず、風(*vāyu)を畏れず、雨(*varṣa)を畏れず、旱魃(*anāvṛṣṭi)を畏れず、塵(*rajas)を畏れず、煙(*dhūma)を畏れず、雲(*meghaskandha)を畏れず、稲妻(*vidyut)を²⁷畏れない。それはどうしてか²⁸という、虚空界は把握されるものとして存在しないから。善男子よ、まさにそのように、菩薩もまた一切法を畏れるべきでない。一切の安楽と苦痛について考えるべきではない。すなわち、菩薩は心が虚空と等しいことによって、魔の集まり(*māraṇikāya)に勝つことができる。無上正等覺を悟ることができる。衆生らの利益を成就することができる」

そこで、その化作された如来はそのようにお説きになると、まさにその時に見えなくなった。

【識】【護】にはみえず、両漢訳では「一切法は区別がなく平等である」という文言の直後に「一切法は愚鈍である」とされている。

25 *glen pa*: *mūḍha (MVy 8921) 【識】「默」【護】「愚冥」

26 *gdags pa*: *prajñapti (MVy 7965) 仏教論書では prajñapti はしばしば「仮設されること(もの)」という術語で解されることが多い。しかし、【識】「不語、不言、是故無有處所。何所以故? 諸法無所生」【護】「諸法愚冥、亦無所徑、無爲、無人、故無人言教、故無處所、無有言教、則無所生」という、本經の漢訳対応箇所、および BHSD *s.v.* を参照に、「表されること」の意味で解釈する。

27 この箇所ので列挙される項目については各訳に異同が見られる。蔵訳にある「旱魃」はいずれの漢訳にも見られない。【識】「火・風・雨・煙・雲・雷・電」【護】「火・風・雨・霧・塵・雷・雲・電・雪」【天】「火・風・水・塵・煙・雲・雷・電」

28 【識】では「是空法故」、【護】では「空者自然、故曰空畏」とし、それぞれ蔵訳とは異なる。

§7 如来の行方と一切法、業と熟すこと、赴くこと²⁹

そこで、弁積菩薩は文殊師利法王子に次のように言った。

「文殊よ、その如来はどこに赴かれたのか」

〔文殊は〕言った。

「やって来られたところへ〔赴かれた〕」

〔弁積菩薩は〕言った。

「それでは、彼〔の如来〕はどこから来られたのか」

〔文殊は〕言った。

「〔如来は〕赴かれたところから〔やって来られた〕」

〔弁積菩薩は〕言った。

「文殊よ、化作されたものは赴くこともなく、来ることもない」

〔文殊は〕言った。

「善男子よ、化作されたものは、赴くこともなく、来ることもない。まさにそのように、一切法もまたそれ（＝化作されたもの）の赴くことをそなえたもの³⁰にほかならない。一切衆生もまたそれ（＝化作されたもの）の赴くことをそなえたものにほかならない」

〔弁積菩薩は〕言った。

「文殊よ、一切法はどのような赴くことをそなえるのですか」

〔文殊は〕言った。

「〔一切法は〕自性として存在することという赴くことをそなえる」

〔弁積菩薩は〕言った。

「また、一切衆生³²はどのような赴くことをそなえるのですか」

29 定方 [1989: 38] 「第6節 にせ仏のゆくえ」

30 *'gros can (pa)*: 本節で繰り返し出現する言葉でキーワードのひとつになっており、後続箇所での *'gro ba* と関連した言葉のようであるが（注39参照）、難解である。Negi 737 では *gamaka（行かしめるもの、到達させしめるもの）となっているが、ここでは試みに「赴くことをそなえたもの」と訳出しておく。諸漢訳の対応箇所では該当する語は見出せず、【識】「諸法亦爾，無所從來，無所從去」【護】「一切諸法亦復如是，一切衆生等無有異，不來，不去」となっていて、単に「一切法は（化作されたもの）同様に来ることも去ることもない」とする。

31 【識】の該当箇所では「一切衆生」に関する言及は見られない。

32 【識】の該当箇所では単に「一切」とする。【護】【天】ではともに「一切衆生」とする。

〔文殊は〕言った。

「〔一切衆生は〕行為の結果（業の異熟³³）のような赴くことをそなえたものと同様である」

〔弁積菩薩は〕言った。

「文殊よ、そうであるならば、一切法は行為の結果（行為と結果³⁴）をそなえないのではないですか」

〔文殊は〕言った。

「善男子よ、法性（*dharmatā³⁵）においては行為の結果（行為と結果³⁶）はない。それはどうしてかという、一切法は法性に随順するから³⁷」

〔弁積菩薩は〕言った。

「そうであるならば、どのようなのであるならば、『〔一切衆生は〕行為の結果（業の異熟³⁸）のような赴くことをそなえたものと同様である』のか」

33 *las kyi rnam par smin pa*: *karmavipāka. この箇所蔵訳からは *karmavipāka を想定できるが、【識】では「如所作是其處」、【護】では「隨其所作」となっていて、単に「所作」=*karman についての言及しているようである。同様の例が§3の末尾でも見られた。注17参照。

34 *las kyi rnam par smin pa*: *karmavipāka. 蔵訳では直前の文殊の回答を受けるような形で *karmavipāka を格限定複合語 (tatpuruṣa) で解釈しているようである。それに対し、【識】【護】の両漢訳では、以下のように並列複合語として解釈しているようにみえる。

【識】「諸法無所作，無有罪？」【護】「一切諸法無作，無報？」

後続箇所の文殊による回答でも、蔵訳における格限定複合語の解釈と漢訳2種における並列複合語の解釈はそれぞれ受け継がれる。いずれの解釈が本来的であるのかの判断は難しいので、括弧で並列複合語として解釈した場合の訳も併記しておく。

35 【護】では「其法界者」とし、蔵訳に対応するが、【識】【天】ではともに「諸法」とする。

36 *las kyi rnam par smin pa*: *karmavipāka. ここでも【識】【護】の両漢訳は *karmavipāka を並列複合語 (dvandva) として解釈している。

【識】「其法者（←去）亦無有作者，無有作罪者」【護】「其法界者無作，無報，無往」

37 この箇所の蔵訳の「法性」(*chos nyid*, *dharmatā) に対応する語として、【識】「法身」【護】「法界」が確認できる。さらに、【護】では「其法界者無作，無報，無往等御」という一文が確認でき、下線部については、「作」=行為 (*karman)、「報」=結果 (*vipāka)、「往」=赴くこと、に対応するようである。

38 この箇所の弁積菩薩の問いかけの文言は諸訳間でやや異なる。蔵訳では、前出の文殊による回答がそのまま引用されるかたちでの問い掛けとなっており、「そうであるならば」というのは、直前の「法性において行為の結果（行為と結果）がない」とい

〔文殊は〕言った。

「その〔一切衆生の〕行為（業）のように、結果（異熟）も同様であり、その〔一切衆生の〕赴くこと³⁹も同様である⁴⁰」

〔弁積菩薩は〕言った。

「文殊よ、行為はどのようなものですか。結果はどのようなものですか。赴くことはどのようなものですか」

〔文殊は〕言った。

「真如⁴¹のように、行為も同様であり、結果も同様であり、赴くことも同様

う文言をうける。【識】では「無有作，無有罪，何以言『人隨其所作？』」とし、「〔法性において〕行為（業）はなく、その結果（異熟）はないのに、どうして『人（衆生）はその行為に従う』と言われるのか」となっていて、蔵訳では指示語になっている内容が明示され、その趣旨も蔵訳とおおよそ一致する。なお、【識】での「人隨其所作」という文言は【護】の先行箇所に見られるものと近似する（注33参照）。一方、【護】では「云何言『有作，有報，有往』而謂『無往？』」とし、他訳とはやや異なる。「どうして、『（衆生には）行為があり、結果があり、赴くことがある』と言いながら『〔法性において、行為と結果乃至〕赴くことがない』と言うのか」というほどの意味になるだろうか。

39 'gro ba については術語の *gati（趣）の訳語であることが多く、本訳注の§4でもそのような用例が確認できた（注20参照）。しかし、本節のこの箇所以降で頻出する 'gro ba に関しては、【識】では「（所）得」、【護】では「所往」「往趣」が対応していることから、術語の *gati（趣）として解釈することは難しいように思われる。その場合、この 'gro ba の原語を特定することは難しいが、MVy 4624で *gamana とされていることや上記漢訳などを参照に、試みに「赴くこと」と解釈しておく。

40 文殊による回答も諸訳で異なる。【識】では「審如所問，人亦無所作，亦無有罪。所以者何？是人之法法身故，亦無有作，亦無有罪。如所作，如所得，是三者等」とし、他訳と異なり、やや難解である。試みに訳出するならば「確かに尋ねられたとおりならば、人（＝衆生）に行為はなく、結果はない。どうしてかということ、人の法も法身であるので、行為はなく、結果はない。行為のように、赴くことのように、この三者は等しい」とする。ここでの「三者」は、前後の文脈、他訳から「行為、結果、赴くこと」の三を指すとみておく。【護】では「如其所作，如其所報，所往亦然」とし、「業のように、その熟することように、その行くところも同様である」として、蔵訳とは少し異なる。

41 de bzhin nyid: *tathatā. 【護】「無本」【天】「眞實法」

【識】では「怛薩阿竭」という語が対応する。西村 [1998]、Karashima [2010] などによれば、この音写語は梵語 *tathāgata に相当する、ガンダーラ語 *tasa-agada の音写語として知られるけれども、この箇所では、蔵訳で *tathatā に相当する語がみられる箇所、【識】では「怛薩阿竭」となっている。一方、本節冒頭の弁積菩薩の問いかけ（T. 15.392a21）や§11（T. 15.392c7ff）、第三章（T. 15.392c28ff）

である」

〔弁積菩薩は〕言った。

「文殊よ、真如においては、行為も存在せず、結果も存在せず、赴くことも存在しない」

〔文殊は〕言った。

「善男子よ、その真如においては行為も存在せず、結果も存在せず、赴くことも存在しない。行為の結果（業の異熟）であるところの赴くこと（行為と結果と赴くこと）⁴²もまさにそのように知られるべきである。行為の結果であるところの赴くこと（行為と結果と赴くこと）⁴³は来ることもないことをそなえたものであり、去ることもないことをそなえたものである。⁴⁴すなわち、それ（=行為の結果であるところの赴くこと）は真如の赴くことから逸脱しないであろう」

このような所説が説かれたとき、仏の威神力によって、長老シャーリプトラ（舍利弗）⁴⁶と長老アーナンダ、他の大声聞たちも世尊・釈迦牟尼の眼前でこの説法を聞いた。

などでは、【識】での「怛薩阿竭」が *tathāgata (*tasa-agada) に相当する例も多数見られる。

42 *les kyi rnam par smin pa'i 'gro ba: *karmavipākagamana* チベット語訳ではこの複合語を格限定複合語および同格複合語として「行為の結果であるところの赴くこと」というように解釈している。一方、直前の部分では *karman, *vipāka, *gamana の3項目は並列的に言及されており、漢訳の相当箇所では、以下のように3項目が並列的に扱われる。

【識】「其作、其罪、其得，如所爲，以故等」【護】「所作、報應、往趣亦然」

前後の文脈とこれらの漢訳の解釈を参照すれば、上記の複合語は並列複合語とみなす方が妥当かもしれないが、そちらの解釈は括弧で提示するに止める。

43 ここも前注42と同様に、漢訳に見られる並列複合語としての解釈を括弧で併記する。

44 【護】では「其罪以過了不見罪，已過、當來亦不離怛薩阿竭故説」という文言が対応するようであり、「其罪（*vipāka）」のみに言及しているようであるが、難解である。

45 定方 [1989: 40] 「第7節 仏は文殊師利を招く」

46 *tshe dang ldan pa sh'a ri'i bu: *āyusmān Śāriputra* (Cf. MVy 9221) 【識】【護】「舍利弗」【天】「尊者舍利子」舍利弗は本経ではこの第2章末尾から登場する。本経において、舍利弗は主に世尊や阿闍世王との遣り取りは見られるものの、文殊との直接の遣り取りはみられないようである。

§8 舍利弗による釈尊への質問

【bam po 第2⁴⁷】

そこで長老舍利弗は世尊に次のように申し述べた。

「世尊よ、法性はただ一つのみならば、彼ら善士・大士たちが様々な言葉によって説いても法性とも矛盾しないのは希有である。世尊よ、一体誰が無上正等覚にむかって決心しないだろうか」

世尊はおっしゃった。

「舍利弗よ、菩薩たちはそのように執着しないという学ぶべきことについて学びつつ、執着しないように説く。すなわち、舍利弗よ、種のように果実もまた同様である。⁵⁰ 舍利弗よ、それと同様に、菩薩たちの学ぶべきことと同じように、彼ら〔菩薩〕の智慧があり、まさにそのように彼ら〔菩薩〕の教説がある。舍利弗よ、汝が学ぶべきことを学ぶように、汝の智慧もまた同様である。弁才（*pratibhā）もまたそれと同様に汝によって獲得される」

§9 声聞の学と菩薩の学

菩薩プラバーヴィユーハ（光嚴）⁵¹は申し述べた。

47 チベット語訳諸資料のうち、BaGPh では *bam po* の記載を欠く。

48 *chos nyid*: *dharmatā. 諸漢訳でこれに相当する訳語が見いだせるのは【識】「法身」のみ。

49 ここの善士・大士（*satpuruṣa, *mahāsattva）は、具体的には、後続の§10でも言及されるように、本経第I章で登場する25名の菩薩を指すと考えられる。一方、第I章で、その25名の菩薩とともに登場する、4名の天子についてはここでは具体的なかたちでは言及されていない。

50 LPhSTU: *sa bon ji lta ba bzhin du 'bras bu yang* (S: *bu'ang*) *de bzhin no* 「種のように果実もまた同様である」

BDJNP: *sa bon ji lta ba bzhin ba* (*ba*: D omits) *skyed kyang de bzhin no* 「種のように生じることまた同様である」

BaBthG *sa bon ji lta ba bzhin du skyed* (Bth: *bskyed*) *kyang de bzhin no* (同上)

【識】「如所種得其實」【護】「如其所種必獲其果」【天】「所得果報」(?)

【識】【護】の読みにある「其實」「其果」が、LPhSTU での *'bras bu* (果実) と対応しているようであるから、ここでは LPhSTU の読みを採用する。なお、【識】と【護】にみえる「所種」は「うえられたもの」の意である。

51 *'od bkod*: *Prabhāvīyūha. 【識】「頂中光明」「光智」【護】「光淨」【天】「光嚴」
*Prabhāvīyūha という名は Vkn Ch. III, §54 に登場する菩薩の名としても見出せる。

「世尊よ、声聞の学ぶべきものはどのようなものですか。菩薩の学ぶべきことはどのようなものですか」

世尊はおっしゃった。

「善男子よ、声聞の学ぶべきことは限りがあり、菩薩の学ぶべきことは限らない。すなわち、善男子よ、声聞の学ぶべきことに限りがあつて、執着がそなわっているように、まさにそのように、その智慧もまた限りがあつて、執着がそなわっている。善男子よ、菩薩の学ぶべきことは限りがなく、無執着であるように、まさにそのようにその智慧もまた限りがなく、無執着である」

§10 文殊らが釈尊の会座にあらわれる

そこで光嚴菩薩・大士は世尊に次のように申し述べた。

「世尊よ、この会座のなかで、いかなるものも聞法を忘れないことをなすならば、彼ら善士がここにやって来て姿を現すことを懇願する。それはどうしてかというと、文殊師利法王子は甚深なものを信じているので、その説法もまた甚深なのです」

そこで、文殊師利法王子は世尊によって連れてこられることで姿を現した。そこで、文殊師利法王子は彼ら25人の善士とともに、彼らデーヴァの取り巻きとともに、世尊のいるところに赴いて、到着すると、世尊の足に頭でもって敬礼し、一方に座した。

§11 如来がお喜びになる話

そこで、光嚴菩薩・大士は文殊師利法王子に次のように言った。

「文殊よ、⁵² どうして、汝は如来の会座より現れながら、一方に座して法を説くのか」

52 藏訳ではこの部分は直前の節の内容、すなわち、文殊がこの会座に現れて一方に座ったことを受けての問いになっているが、他の漢訳では若干異なる。すなわち、

【識】「佛在是間，而若何縁得在異處而説法？」

【護】「何故越如来會，獨於屏處而論講經？」

【天】「云何大士離於佛所異處説法？」

というように、文殊が釈尊の会座とは別のところで他の菩薩とともにあったことの理由を尋ねているようである。

〔文殊は〕言った。

「善男子よ、仏・世尊らはお喜びになりがたい。⁵³すなわち、あらゆる話によって喜ばせることはできない」

〔光厳菩薩は〕言った。

「文殊よ、どのような話によって如来はお喜びになるのでしょうか」

〔文殊は〕言った。

「世尊のみがご存知で、理解なさっているけれども、私がひらめくように、まさにそのように説く。善男子よ、ある話で、法界⁵⁴とも矛盾せず、真如⁵⁵とも矛盾せず、真際⁵⁶とも矛盾しない、その様な話に如来はお喜びになるであろう。ある話で、争いなく、論争なく、縁なく、過ち（*upālabha）なく、増益すること（*samāropa/*adhyāropa）もない、そのような話に如来はお喜びになるであろう。ある話で、自己に関して増益せず、他に関して増益せず、法に関して増益せず、非法に関して増益せず、輪廻に関して増益せず、涅槃に関して増益しない。その様な話によって如来はお喜びになるであろう」

§12 釈尊が文殊を賞賛する

そこで世尊は文殊師利法王子に「よきかな（*sādhu）」という言葉を与えて、
「よきかな、よきかな（*sādhu sādhu）。文殊よ、あなたのこの言葉はよく語られたものである。すなわち、このような話によって如来はお喜びになるであろうけれども、文殊よ、ある話で、あらゆる戯論（*prapañca）から離れ、非常に微細でもなく、非常に粗雑でもなく、特徴のない、その話が説かれるならば、三昧も捨てず、常に、よく定まった心にも入りつつ、

53 【識】「所以不在是問者，佛甚尊不可當」【護】「知如來甚尊而不可當諸佛」という文言がこの直前に挿入されており、「仏・世尊は非常に尊いので、面と向かってはなすべきではない」ということが述べられている

54 *chos kyi dbyings*: *dharmadhātu. 【識】「法」(?) 【護】「法界」【天】「法界」この箇所では *dharmadhātu という言葉は *tathatā や *bhūtakoti とほぼ同義に用いられている。

55 *de bzhin nyid*: *tathatā. 【識】「恒薩阿竭」【護】「本無」【天】（欠）注41でも指摘したように、ここでも【識】では「恒薩阿竭」が *tathatā に対応するようである。

56 *yang dag pa'i mtha'*: *bhūtakoti (MVy 1708) 【識】「如本際」【護】「本際」【天】「眞際」

説くことをなすとき、いかなる法も増大することも、減退することも見られない。その様な話によって如来はお喜びになるだろう」
このような教説が語られたとき、八千の菩薩⁵⁷が無生法忍を得たものとなった。

57 【識】「八百天子」【護】「八百菩薩」【天】「八千菩薩」

表 1 <阿闍世王経> 第 II 章漢訳・蔵訳諸本対照表

	T. 626	T. 627	T. 628	A	B	Ba	Bth	D	G	J	L	N	P	Ph	S	T	U
§1	391b26	409c11	431c9	45b3	287a4	8b3	58a1	220a3	8a3	243b1	285a2	352b1	229b7	18b2	278b4	259a3	249a1
§2	391c2	409c16	431c17	45b6	287a8	8b7	58a4	220a5	8a7	243b5	285a7	352b5	230a2	18b7	279a1	259a6	249a5
§3	391c10	409c26	431c24	45b9(-11)	287b4	9a5	58a8	220b2	8b1	244a1	285b3	353a3	230a6	19a5	279a6	259b4	249b2
§4	391c18	410a4	432a5	—	288a1	9b3	58b2	220b5	8b5	244a4	285b8	353b1	230b2	19b2	279b3	260a1	249b7
§5	392a8	410a22	432a22	—	288b6	10b2	59a2	221a7	9a6	244b7	286b7	354b1	231a5	20b1	280b1	260b7	250b5
§6	392a14	410a29	432a26	—	289a1	10b5	59a5	221b2	9a9	245a2	287a3	354b5	231a8	20b5	280b5	261a3	250b8
§7	392a20	410b9	432b7	—	289a7	11a4	59a9	221b6	9b4	245a6	287a8	355a4	231b5	21a3	281a3	261b1	251a6
§8	392b14	410b28	432b26	—	290a2	12a1	59b8	222a7	10a3	245b7	288a5	356a2	232a6	21b8	281b7	262a5	252a3
§9	392b19	410c7	432c5	—	290a7	12a5	60a3	222b3	10a8	246a3	288b2	356a7	232b2	22a5	282a5	262b2	252a8
§10	392b23	410c12	432c11	—	290b2	12b2	60a6	222b5	10a10	246a6	288b6	356b4	232b5	22b1	282b1	262b5	252b3
§11	392b28	410c18	432c19	—	290b6	12b6	60a9	223a1	10b4	246b1	289a2	357a1	232b8	22b5	282b5	263a2	253b8
§12	392c12-18	410a1-8	433a3-8	—	291a4-8	13a5- 13b2	60b6- 61a1	223a6- b1	10b9- 11a3	246b6- 247a1	289b1-6	357b1-5	232b6- 233a1	23a5- b2	283a5- b1	262a8- b4	253a7- b3